

---

# M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M大写真部副部長の喧騒

### 【Zコード】

Z0777Z

### 【作者名】

柏木杏花

### 【あらすじ】

M大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まつてくるサークルだ。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生ってなんなんだ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらない

と思つてゐるのにー。イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタ  
コメ。ちょっとドタコメ。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試し  
ください。

## 第一話 突然の婚約話

「惣介、ちょっと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だといつのこと、珍しく家で「口々」してたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。まつうら そうすけ M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言つのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がだらだらと鬱陶しいわね。あんた、つきあつてる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファーに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家で「口々」してるわけがない。平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どうってことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなにのんびりするのも久しぶりだった。

もつとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せつかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、霸気がないつたら……」

霸気がないのは、まあ認める。万事無難ってのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。  
だいたい、イケメンにそこそこの付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるつてことだ。親の欲求ってのはないのかな。

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ？？？」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

「許嫁……？」

許嫁つて、もしかして、もしかしなくとも、婚約者みたいなもんだよな？ みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの？ あり得ないよなあ。

「母さん、それ、なんの冗談？」

手に持つていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして違わないんでしょう。ならいいじゃない」

「違わないわけないだろ。なに言つてんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しちゃなんて言つたのよ。婚約よ

そんなに違わないだろ。 いますぐか、あとかの違ひじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものか」「へへ可愛い子なのよ。気にならない?」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返つて。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子か気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないうつて言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねない  
じゃないか」

そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいなんだ。

「……まさか惣介、あんたホモか不能じやないでしょ」

言つに事欠いて、なんて推測をしやがるかな、このおかんは。

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

ちょっと待て。なんで二者択一なんだよ。

「どっちも違います！」

いい加減、怒鳴りたくなつてきたが、あいにくチャイムが鳴つたので、俺は氣を削がれた。

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。

## 第一話 突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただき、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも(へへへ)

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディーですけど、読んだ人がコメディーのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

## 第一話 なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を搔き鳴りながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。一歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるのは、中学に行つて、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思つてる。べつにいまの呼び名も嫌じやないし、構わないんだけど。

生まれたときから知つてゐるし、家族の延長みたいな存在だ。

「こま、バイトに行つてるよ」

「そつかあ。残念」

「どうかしたの？」

「算数の宿題、わかんないとこあるから、教えてもらいたかったの」

やついえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言つてたな。

「俺でよかつたら、みてあげよつか?」

「いいの?」

「いいよ。どう?」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだつた。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しおう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習つていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唸つた。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちょっとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やつかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただつたの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がつて教えてもらいたいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちがわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦労して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはつきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉を二ねぐり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言つんだ。

「惣介くん、間違いつてなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしていても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だらうけれど。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まってる写真が所狭しと置いてあるから、写真まみれに見えるんだろう。それでも飾つてあるのは、ほんの一  
部なんだが。

「写真部だからね」

中学からさほど変わり映えがない部屋は、ベッドと勉強机、あとは壁の本棚しかない。

納戸から二台の机と座布団を持ってきてもしんたかとうせ宿題も一、三問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持つてきた。隣に腰かけると、凜が愉しそうに笑った。

「家庭教師の『マーシャルみたい』」

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらいつときは違うの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ」

凛かわからなかつた問題は、たれでも躊躇問題だ。1時間70分は130分。1・8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解答できない。けれど、130分は何時間何分ですか？　という問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かつた。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外ありました。終わらせることができた。

「惣介くん、ありがと！」

「どういたしまして」

持つてきた荷物を手提げ鞄に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取つて呟いた。

「「Jのお姉さん、す」「Jく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮つたの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとつで、みんなこんなに綺麗なの？ なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

Jの写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、田につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰っていないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れているのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰つても誰もいないんだよな。凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしい。いや、今田は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと云いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくく、言葉だと思い、言い直す。

「えっと…飲み会に行くけど、しばらく下こう。ね袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「うん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずなんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいのときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるむべくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰つてくれるから」

「やつか

「飲み会つてなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだ  
もつか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再  
来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうなると、お袋が  
言つた婚約者も現実味を帯びて迫つてくるのかな。

俺はうきさりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの?」

「ああ、いや、わざわざのにお袋が、許嫁がどうのこうのって言つ  
てたんだ。まあ、冗談なんだろ? けどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだる、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかつたの?」

「? 凜ちゃん、なんで知つてんの?」

「なんであつて、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言つてた、ものすごく可愛い許嫁つて……凛……?  
そりや、可愛いだらつ。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言つまでもない。

第一話

なんで許嫁が小学生なんだよー！（後書き）

## 第二話 学祭打ち上げコンパ

「お疲れ様～」

「無事終わってよかつたね」

「かんぱーい」

M大から一駅のこの居酒屋は、写真部がコンパでよく利用するチーン店だ。

新入生歓迎コンパ、学祭打ち上げコンパ、卒業生追い出しコンパ、この三つをここで行うのが慣例になっている。一階を貸し切ることができるので、気兼ねなく騒げるのだ。

今日参加しているのは、全部で十五人ほど。

四年は内定をもらっているか、大学院に残ることが決まっている者しか来ていないので、他のコンパに比べると出席率は低い。

「今年は本当に良かつたよな。去年とは比べ物にならないくらいこ抗击疫情も立派なものだったぞ」

自嘲氣味に頭を搔いて苦笑するのは、隣に座っている篠崎部長しのざきだ。学祭は一、三年が中心になつて運営するから、四年の部長は、去年メインで動いていた。

学祭で、写真部は個人写真の展示会とは別に、小さな写真をモザイク状に貼り合わせて巨大な名画を制作するのがここ数年、恒例になつているのだが、その名画が特に好評だった。

「佐々木が頑張ってくれたんで」

俺が写真の責任者をねぎらひつと、向かいに座る佐々木は照れくさそうに首を振った。

「いや、写真が早い段階で集まつたからできたんすよ。亜衣ちゃんのおかげです」

がつしりした体格で、色も黒いから熊みたいなやつなんだが、こいつは写真部の有望株だ。カメラの腕もあることながら、フォトショップをデザイナー並みに使いこなす必殺技を持つてゐる。全然似合わないのに……。

どう見ても、ラグビーか柔道でもやらせた方が、向いてそうに見えるんだけどな。

「訊いたよ。ブログの女王が、モデル集めに協力してくれたそぐだな」

ブログの女王、外村亜衣とのむらあいは、今日のコンパに来ている。写真部ではないが、学祭で多大な協力をしてくれたので、感謝の意を表して招待したというわけだ。

「ほんと。亜衣ちゃんには超感謝だよね。写真部は、足向けて寝られないよ」

亜衣に手を合わせて併んでいるのは、小畠さくらだ。文学部一年。飲み会好きのお祭り娘。明るく元気で、性格は少々辛辣つてどこかな。

どうでもいいけど、いつまで併んでいるんだか。あれじや亜衣は仏像扱いだ。

案の定、併まれている本人は、盛大に嫌そうな顔をしている。

「さくらさん、挙まないでください。まだ生きてますから」

亜衣も似たような感想を抱いたのか、迷惑そうに頬を引きつらせていました。さくらは念佛でも唱えそうな勢いだったもんな。

でも、なんだかんだ言つても仲は良いよ。亜衣も学年は一年だけど、さくらと同じ文学部だし。文学部の女子は、ショッちゅうつるんでるよな。よほど、気が合つんだろう。

「とにかく、今年は亜衣ちゃんのおかげで、写真部も勉強になつたよ」

「え？ そうなんですか？」

意外そつに首を傾げる亜衣の顔は、正統派の美人だ。ちょっと欠点が見当たらない。陽気で人当たりもいいから写真部の中にも、ひそかに思いを寄せてる奴がいるんじゃないのかな。

「ブログで告知すれば、写真部の活動も周知できるし、賛同もしてもらえるんだってわかつたからね」

「確かに去年までは思いつかなかつたよな。学外のひとに、大々的に名画のモデルになつてもらおつなんて」

腕を組んだ部長が、感心しきりで何度も頷いている。

名画を制作するのに、千枚近くの写真を貼り合わせるのだが、その一枚一枚にひとを入れる。言わば証明写真を繋ぎ合せるような作業だ。

去年までは、ほとんどが学内の学生に頼み込んで撮影していたから、数を揃えるのが大変だつた。搬入ぎりぎりまで部長や俺ら数人

が大学に泊まり込んで、最後は自分たちで撮り合いながら穴を埋めていく、地獄のような修羅場だったのだ。

ネットをいかに活用するか、この辺のことは、また来年の課題だな。けれど、布石を置けたのは大きな収穫だった。俺は感謝の気持ちで、皿衣のグラスにビールを注いだ。

「ところで部長、就活は終わつたんでしょう？」

「おかげさんで」

「おめでとうござります……って一回田なんですね、お祝い言つた。春に内定もらつたのに、就活続けてたつてことは、納得してなかつたんですか？」

部長がジョッキを傾けるのを、俺は久しぶりに見た気がした。実際、長い間、一緒に飲む機会がなかつたんだよな。

「まあな。やつぱり、ちょっとでも理想に近いとこを目指したかったし」

「耳が痛いですよ。俺もカウンドダウンが始まつてますから」

「松浦、お前は話が来てんだろ？ 学祭の写真にどつかの出版社が興味を持つたつて訊いてるぞ」

「ええ、ありがたい話なんですけど、あれはモデルの力ですからね……」

学祭で好評だった名画の取材に来ていた雑誌社が、ついでに見ていった写真展で、俺の写真に興味を持つてくれたというわけだ。で、その写真のモデルが……、

「瀬戸柚希か。そういうや、あの子の正体訊いたときは、正直、腰が抜けるほど驚いたぞ」

部長は、少し離れた場所に座る柚希を眺めて、大きく唸ると首を傾げた。

「こままだに信じられん。あの絶世の美女が男とは……」

「同感です」

俺の部屋にある写真は、夏休みに写真部の後輩を写したものなんだが、その後輩が柚希だ。凜が「このお姉さん、凄く綺麗」と言った、あの写真である。

柚希が抱える問題は極めて複雑怪奇で、説明すると長くなるが、ひとことで言つとしたら、現在の柚希は女装の達人ってことかな。現に今日も、読者モデル並みに可愛らしくセンスのある着こなしを披露している……らしい。ここに着いた途端、女の子に囲まれて、そう騒がれていた。俺にはイマイチよくわからないが。

法学部の一年。亜衣とは中学からの同級生だ。

柚希は一時、悩みを抱え込んでいた時期があつて、相談に乗つたりしていたから、俺にとつては妹みたいな存在である。男だけど……。

「男にしどぐの、勿体なさすぎだろ、あれは」

「部長には、長年連れ添った彼女がいるでしょ」  
「が」

「長年過ぎて、空氣みたいだけだな」

確かに、半同棲状態と訊いたよつな、訊いてないよつな……。

「そんなに長いんですか？」

「小中高、一緒に」

「それじゃ、幼なじみの域ですね」

「まあな。つきあい始めたのは中学に入つてからだけだ」

お互い、成長過程を見届けた者同士の恋愛とは、いかなるものなんだらう。正直、想像できない。空氣みたいと言われても、それも考えられないよ。

「結婚とか、考えるんですか？」

「考えな」と言つたら、嘘になるな。他のだれかと……とは到底思えないし、いずれ時期が来れば、あいつと一緒になるだろ」

「小学校のときから、意識してました？」

「いや、からかつて遊んでたな」

だよな。小学生で恋愛とか結婚なんて、考えないよな、普通。結果として小学校からの同級生が結婚相手になることがあつてもさ。俺だつて、小学生の時に、それなりに好きな女の子くら二ついた

はずだけど、いまは顔も思い出せないし。

凜に「許嫁つて、あたしだから」と言われたあと、我に返った俺は、お袋に怒鳴り込もうとして、からうじて止めた。韓流ドラマに相対しているお袋の邪魔をしたら、どんな祟りがあるかわかつたもんじゃない。

あのひとは我が親ながら、正気の沙汰とは思えないようなところがあるからな。俺の忍耐力は、あの母親の所業が育んだものかもしない。

俺はビールのジョッキを傾けながら、肩を落とした。  
まさかあの婚約話が真剣なものじゃないだろうけど、凜の耳にも入つてるのが気になる。凜が知つてゐることは、向こうの親も絡んでるつてことだよな。うーん、ビうつなつてんだろ。

「どうかしたのか？ 元気ないな

部長が肩を組んで寄りかかってきた。からんでるのか酔つてゐるのか、どっちなんだろう。しかしこのひと、眼鏡がよく似合つよな。なんかこう、科学者っぽい印象だ。期待を裏切らない理学部だけぞ。

「部長、実は俺、婚約してるんですけど」

「はあ？」

「その婚約相手っていうか、許嫁が小学生なんですよ

「はあ～～？」

「俺、どうかかって『うと熟女の方が好きなんですか』、どうしたらしいんですかね？」

「……お前、良いとこの坊ちゃんが穏やかな人生送つてます、てな感じに見えたけど、隠れ波乱万丈タイプか？」

「なんですか、その隠れ肥満みたいなたとえは」

「いやでも、本当にそいつ見えるしなあ……」

部長は、『やにやと人の悪い顔で、口の端に笑みを乗せた。面白がってるな、これは。』

「でもな、別に、ややこじることないだろ。嫌なら断ればいいだけじゃないか」

「うわの母親の恐怖を知らないから、そんなこと言へるんですよ」

「なんかよくわからんが、それなら、彼女を家に連れて帰つてみる。一発で『破算になるつて』

「今、彼女いないんです」

「あれ？ 確かいたはずだろ？ 美大かどつかの……」

「春先に別れて、それから独り身です」

「すぐ作れよ。ちやつちやと」

「無茶言わないで下せ。晩メシジヤあるまにし、すぐ作つたり

できません

「根性が足りないんだよ、モテないわけでもないのに。とりあえず、いないなら誰か適当な子に頼め。同伴帰宅してくれってな。写真部の後輩でもいいんじゃねえの? 綺麗どころが揃ってるじゃないか」

「うーん……」

酔っぱらいの戯言とはいえ、なんか説得力あるなあ。しかし、同伴帰宅って正しい日本語なのか? もうちょっと適切な言葉、ないわけ? なんか響きが、いかがわしい気がするんだけど。

まあ、お袋の話なんか全然本気にしてないし、無視しちゃいいんだろうけど、凜をすでに巻き込んでるのが気になるんだよ。俺としては、とにかく、穩便に済ませたいわけだ。

しかし、酔ってる部長が寄りかかっていて、いいかげん重い。

「佐々木、佐々木」

俺は佐々木を手招きして呼び寄せると、つっかえ棒係を贈呈した。よし、身が軽くなつたぞ。

佐々木は不服そうな顔をしていたが、お前のその有り余る筋肉を有効利用しないでどうするんだ。

俺は佐々木の肩を叩いて、言い訳するようटテ席を立つと、トイレに向かうこととした。

第二話

学祭打ち上げコンペ（後書き）

## 第四話 大迷惑な源氏物語

ちょっと酔いを醒まして、二階に戻る。

宴もたけなわ。部屋中にアルコールと料理の匂いが充満し、酔っぱらった部員たちが、ふらふらと身体を揺らしていた。

これくらいの時間帯になると、元いた場所から各自、動き回り、気の合う者同士が、気の合ひ話に花を咲かせている。

出入り口の横では、さくらたちが固まっていた。姫しくも女子の子四人かと思いきや、柚希が混じっていた。と言つても、女子会の雰囲気を損ねるようなものでは、まったくないな。両手に花という感じでもないし、完全に溶け込んでいるのが笑える。

「あ、副部長、こっちは座りませんか？」

さくらに呼ばれて、俺はその女子集団に突入することになつた。さくらに亜衣、柚希は前述のとおりだが、もう一人は松浦碧まつうらあおいだ。碧は文学部一年。この中では、最も長い時間を共有した後輩だが、俺はいまだに碧のことがよくわからない。華奢で童顔。初対面のひとからは高校生に見られているだろう。鎖骨まで伸びた髪がくせ毛で、可愛いといえば可愛い子なんだが、天然でふわふわしていて、どこにピントが合っているのかわかりづらい。

そう、糸のない風船みたいな感じかな。まあ、そういうところも、この子の魅力なんだろうけど。

「何の話で盛り上がつてたの？」

「源氏物語です」

……それって、盛り上がるよいつなネタか？

「光源氏の本命は、藤壺か紫のどひたちだりひつて、現在、白熱したバトルを展開中なんです」

「はあ……？」

不覚だ。

あまり……といふか、全然面白くないグループに紛れ込んでしまった。

「わたしは藤壺派で、亜衣ちゃんは紫派なんです。副部長はどうですか？」

なんかこの、有無も言わぬ強引な一者派で、誰かを思い出すぞ。

しかし、こんな話題で派閥ができるんのか。政治家も真っ青だ。

源氏物語って言われても、ほとんど知らないんだよな。とはいえるが、一応上級生として、知らぬ存じぬでは格好悪いか。えつと確か、男前

前の光源氏が、次々に女を食い散らかす話だったよな。

紫は、子どもの頃から手元に置いて育てた理想の妻で、藤壺は父親の後妻で、憧れの存在……で間違いないかな？

「柚希ちゃんは、どつちなわけ？」

「Jの中では、一番冷静で常識的な感性を持つてそうな、柚希の意見を参考にさせてもらおつ。似たようなことを言つておけば、場違いにはならないはずだ。」

「源氏物語はちゃんと読んでないんですけど、紫に対する行為は、未成年者略取誘拐にある可能性があると思つんです」

ひええええええええええ、源氏物語が、未成年者略取誘拐かよ。  
そうか。法学部だもんな。情緒もへつたくれもないな。

「でも、藤壺は父親の後妻ですから、血が繋がっていないとはいっても、直系血族です。よつて、父親が亡くなつても、婚姻関係を結べません。民法第734条に違反します。したがつて、藤壺、紫、ビシリも賛同できません」

…………… そうですね。そうですねとも、はい。……いや、なんか違うぞ！

眩暈がしてきた。

「そもそも、どうして最初の妻をもつと大切にしなかつたのか、そこが理解できないんです。謎に満ちた物語ですね」

柚希の方が、よほど謎に満ちている。といふか、酔っぱらつてゐんじやないの、この子。派手な顔して、あんまり強くないんだよな、アルコールに。いや、顔は関係ないか。うーん、俺も酔っぱらつてるのかな。

そういうえば、光源氏の最初の妻つてだれだけ？ 全然思い出せないなあ。

柚希の隣で、なぜか碧がそわそわと落ち着かない様子で、ビールを口に運んでいる。どうしたんだろう。

しかし、次々に無差別恋愛を繰り返すのが、源氏物語だろ？ 最初の妻を愛でて終わつたら、それはもう、源氏物語とは呼べないのではないか？

残念ながら、柚希の意見はまったく参考にならなかつた。この理知的な後輩が戦力外とは、きわめて遺憾だ。しかたがないので、俺

は碧に視線を向けた。

「碧ちゃんは？」

先に碧の意見を訊けばよかつた。碧は文学部だから、あんな奇想天外な意見にはならないだろう。

「あたしがもし光源氏だったら、相手が何人いても、そのときはそれぞれ、本気だつたと思うんです」

「なるほど……」

俺は感心して頷いた。が、女の子が源氏物語を読んで、自分がもし光源氏だったら……なんて考えるものなの？

「でも現代人の価値観からいえば、平氣で浮氣するような男は、生きる価値なんかないんです」

おつかねー……。関西人がよく言いつづく「死んだらええのに」って勢いかな。だけど、まあ、そうだよな。一股三股どころじゃないんだから。

でもなんか、話をしているうちに、少しづつ源氏物語の片鱗を思い出してきた。昔、疑問に思ったことがあるんだ。いろんな相手に魅力を感じて、衝動を抑えきれない、というのは理解できる。俺も男だし。

ただ、その人数の多さには、首を傾げざるを得ないんだよな。御簾越しに、文に焚き付けられた香の香りに惹かれて……って、それだけでそこまでするか？ いくらそういうことが認められてた時代とはいえ、大変なエネルギーだぞ。

俺が思うに、光源氏は病氣だったんじゃないのかな。多情症とかそんな精神疾患、ありそつじやない？

作者の紫式部は、そんなひとが身近にいたんじゃないのかな。そのひとをモチールした可能性はある気がするなあ。

「でも、何度読んでも、よくわからないんです。その時代に生まれて、その時代の文化の中で育つて、読んでみたかった物語ですね」

なんか、気合いのはいった意見だ。そういうや鶴は、酔っぱらつて歴女になるんだった。源氏物語も歴女の守備範囲なのかな。

「俺も、それに真剣だったという意見は納得できるよ。男は馬鹿だから、その時々に夢中になつて、他のことは忘れてしまつし」

「おお、W松浦で揃えてきましたか」

さくらの台詞に、みんな吹き出した。俺と轟は苗字が同じ松浦だから、こんな指摘になるわけだ。

「でもやっぱり、藤壺じゃないかな。罪を背負つてでも望んだのは、藤壺だけみたいだし」

「とにかく、藤壺を選ぶとマザコンですね」

「まあ？ 藤壺を選ぶとマザコンなの？」

「当然です」

「紫を選んでたら、なんて言われてたの？」

「……………」

なんじゅそりや。

「…………源氏物語についての討論だよね？ これ」

「副部長がマザコンかロリコンか、調査してたに決まってるじゃな  
いですか」

なにを今更、と続いたそぐらの言葉に、俺は後輩たちにからかわ  
れていたのだと気がついた。

「やられた」

「めかみを抑える俺に、亜衣が笑いながら訊いてきた。

「…………で、小学生の許嫁がいるって、本当なんですか？」

「……なんでそれを…………？」

「さつき部長さんにして、そんな話をしたんだしょ？ 「伝言ゲームみ  
たいに回っていましたよ」

「うーん……。部屋も広くはないし、声も絞つてなかつたから、当  
然と言えば当然か。しかしこの話、ここにいる写真部全員に知れ渡  
つたところとか。頭が痛いよ。

「わたし、副部長さんは柚希が本命かと思つたんですけど…………」

「亜衣ちゃん、君ねえ…………」

「わたしも。瀬戸さんが副部長のモデルするって訊いたときは、てきつ口説を落とす魂胆かと思つたもん」

「セベリヤンまで、なに書つてるんだよ」

柚希にモーテルを頼んだときは、もう柚希が男だとわかつていたから、そんな下心は毛頭ありませんでした！

「あたしも思つた」

とじめは鶴か。『ブルータス、お前もか』と呟いたジュリアスシーザーの気持ちが、いまよづやくわかったよ。

「鶴さんまで……」

がつくり脱力してるのは、俺じゃなくて柚希だ。

「でもあたし、訊いたことあつたでしょ。副部長とつきあつてるの？ つて」

「事実無根なんですから、忘れてください」

「一時、つのブログでも話題になつてたんですよ」

「亜衣ちゃんのブログに？ なんて？」

俺の問いかけに、心底愉しそうな様子の亜衣が説明してくれた。

「柚希がうちのブログにコメント書き込むとき、ハンドルネームが

『コズ』なんで、読むひとが読んだらすぐわかるんです。で、『写真部の先輩とふたりでカラオケに行つた』って書いたことがあって、みんなが推察してたんです。柚希の『データの相手は誰だろ?』って

「す、」「瀬戸さん、やつぱり人気あるんだ」

「碧ちゃん、怒るか妬くかしてください。無邪気に喜んでないで……」

「なんで? モテるのカッコイイじゃん。それに、カラオケ行つたデータの相手、副部長でしょ。そのときモデル引き受けることになつた、って言つてたじゃない。怒つたり妬いたりするようなことなの?」

「……」

柚希が溜め息をついた。

亜衣やさくらに同じことを言われてもまるで意に介さないのに、碧の言動にだけ敏感に反応しているのは、現在このふたりがつきあつているからだ。

揉めるだけ揉めて、学祭の最終日にまとまつたから、まだつきあい始めて一週間の初々しいカップルである。どう見ても男女交際してるように絵柄には見えないけど。

碧に男だとばれてひと悶着の後、つきあいつになつてから、柚希は自分の性別を周囲に隠していない。だから、写真部の部員は全員、柚希が男だといつことも碧とつきあつていてることも知っている。柚希と碧のこんなやつとりも、珍しい光景ではなかつた。さくらの弁を借りるなら、世にも面白いカップルだ。

「副部長、マザコンはともかく、小学生は犯罪ですよ。ヘンタイで

すよ。人間失格ですよ。もう一十歳過ぎてるんですから、事件になつたら全国に名前が公表されますよ」

セベリヤとモジモジ、刃物のように鋭い口調を出す。

「…………肝に銘じるよ」

「松浦さん、熟女好きは個人の嗜好ですから、不倫は犯罪ですよ」

柚希はとモジモジ、…………以下同文。

「…………重ねて肝に銘じるよ」

家ではお袋にホモや不能の疑いをかけられ、コンパでは後輩にマザコソのお墨付きを頂戴し、口コソコソや不倫は犯罪だと釘を刺された。

「…………なんて一日だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

---

M大写真部副部長の喧騒

2011年12月5日22時46分発行